

ニッポン 日本が一杯詰った居合之道を皆で学ぶ

東京士魂會會長 森 顯

「人が道を求めるのではなく、道が人を求める」若い頃にはスポーツに興味を持ち、ある武道家から「スポーツは人生三十五年で終わるが武道家は人生七十年でも八十年でもどんなに老いぼれても正しい修行を続けていけば真理を感じずる時が来る」と云われ、空手道や合気道の門に入る。「鹿島神宮は武之聖地」だと云われて鹿島流の鹿島神流や鹿島神傳直心影流を兼修すると先人が悟っていた呼吸法、手ノ内、間合等を感じる。やがて日本刀の刃筋を全身で感じる為巻藁を斬りはじめた。中村泰三郎師から「君は居合もやるとよい」と言われて、居合の門を叩く。殺し合いの業は命を守る理合に進化して個性を重んじる身体アートにもなり得る事を悟る。「この日本の理は素晴らしい。武器である日本刀との調和も美しい」居合の源を求めて「古流と我流の違いは何か、先人が導く道は真心に繋がる」と亡くなった師の言に従う。居合術は精神と身体を一致させる道。別に勝ち負けの居合ではなく人作りとしての居合を目指す。当会は偶然にも道祖生誕之地山形県居合神社、修行之地釜ヶ澤大明神や終焉之地埼玉県川越市の蓮馨寺と繋がりを持つ。林崎道祖は多数の天才達を見出し道祖が過ぎた地で同源の林崎流、田宮流、伯耆流や関口流等の師々と共に当会は英信流を代表して奉納演武を続けて十年近く。当会が辿り着いた信条は「武の理合とは自然の法則で日本人が生きていく正道。全ての理は一本。日本の文化遺産である武之道とは、武神の下で鋭く研ぎ澄ました感性と豊富な知性を養い、運動能力に富んだ肉体に勇氣と共に強靱な精神力で結合させる作業である。『術』とは物理的な業。その『術』に氣の流れと武心を添えて『道』に進化させたい。居合道の醍醐味は形や技でもなく、精神と理合から発する武心である事に気付く。流れを大切に良き伝統は残し悪しき慣習は絶つ。これが我々の目指す道と心得る。この国の先達が創造した撓やかな思考に培った不動の哲学は素晴らしい。居合道は日本の哲学である」そんな事を追い求める仲間達三十人超が相集い日本刀を用い定められた武技を通じて、日本古来の武の精神を探索。今日に通ずる身体操法や武徳修養に努めて礼儀慈愛に富む質実剛健の精神を作興し国家社会に貢献できる人材育成のため居合道を含め鹿島流や流鏑馬と共に国家安穩や武運長久を神仏に祈願奉納活動を続ける。

居合道祖が鹿島神宮の境内で塚原卜伝から一ノ太刀を学んだ面影を会得する為、古流剣術の鹿島神傳直心影流や斬法術、柔術、日本在来馬の和駒上で平安後期に武の理合を創造した和式騎馬術、弓術、長物術等を兼修して「居合術は何か」を探索する。天地の魂が宿る肉体と鍛えた精神を融合する文武両道の理合は日本人の宝。日本民族は古武道や和式馬道から六つの課題を通して己を学ぶ。一、呼吸法は生きる証。下丹田で細く長く息を吐き、吐き切った勢いで横隔膜を下げて下腹を膨らませて自然に氣を腹にしまう。呼吸法で体の各部の意識をひとつにまとめると思わぬ氣力が湧く。武道の呼吸は生の源。二、体の縦軸・横軸を感じて揺るぎない意思を持つ。有事の時は心が乱れて自身の軸を見失う。身の軸を学ぶには短足の和駒に乗って足底の感覚を磨いて感性を鋭く研ぎ澄し精神力で治める。自分の正中線を自覚すると軸が体内で育ち己の身も意志も強固になる。三、歯と眼を守る。馬に乗って矢を射ったり、剣術修業を続けると歯を食い縛るので痛める。歯数が減ると武力が衰えて痴呆症になると伝わる。昔の食物は固かったが、今日の柔い食物を四十回程噛んで液体状にして胃に流し込み、歯や顎を丈夫にして脳に刺激を与えて胃腸は安定する。消化機能の内臓が荒れると精神面も病み身体の各部が自然に反応しなくなり、業の出が遅れる。眼力も衰えると戦闘意欲が下がる。眼はなるべく遠山之目付で大きな視野を保ち衰えを遅らせない。草原での馬上で広角の目付は予知能力を育てる。四、古武道の理合で日本人の間合を知る。刀の長さは二尺四寸(七三センチ)。これ以上近づくと命の危険に晒される。この間合を感じて実社会での友人や他人との距離を心得る。五、「最小限の人力で最大限の出力ができる方程式」が古の武道理合だと悟る。武士が修業によって無限の肉体と精神を生み出そうと努力した足跡を感じる。残った伝書の中に先人達が悟って記述した文を辿りながら、劍の機能や生き残った和駒の動きを体感すると、消滅した日本人の理合「自然の法則」の輪郭が浮かぶ。六、自然界の力を味方にする法が武術にも使える氣功法。自然界の申し子一和駒上で武者達が創作した武術の理合では馬の悟りを開くと云う。自然界との会話法が和式馬術の総集編である大坪流に包含される。流祖大坪慶秀は伝書内で「拳を強くせんにはたてとれ弱くせんにはふせてとるべし」と人馬間の会話での手ノ内を説く。柔らかい手ノ内と両膝に強力な腰力で馬の振動を吸収して足底で玉鋼製の和鐙の感触を確かめながら踵で馬心を知る。駒と劍の間合いを知る事は日本人を知る事也。■